

目次

— 『風』 『談論風発』 2015	図書館の基本を求めて IX
↳ 2017より	
—	

蔵書は動いているか、生かされているか	1
書庫の資料の保存と廃棄	7
「資料提供」の意味と司書の専門性	13
「思い出の本との再会」と図書館の役割	15
文庫本と図書館	21
民営化は何をもたらしたか	27
図書館から失われてしまったもの	33
図書館員としての立場、利用者としての立場	39
利用者と図書館員の会話がなくなつてゆく	45
豊田市中央図書館の状況と問題	51
大規模複合施設と図書館の指定管理	56
モニスタライ化するTRC指定管理	62
排除・制限せず、萎縮せず、資料の収集・提供を	68
伊藤昭治さんのこと	74

『移動図書館ひまわり号』の復刊	78
タブーをつくらず、民営化について論議を はじめて岡山に来た頃のこと	84
だれのための図書館評価か	96
データでみる図書館民営化の実態―経費は削減されていない こうして指定管理料は増えてゆく	102
図書館の発展は出版文化も発展させる	116
図書館とにぎわい―目的化のあやうさ	122
子どもの本の改訂と資料の保存	149
図書館の新設と図書館員のかかわり	155
図書館職員と市民の評価―アンケート調査の「自由意見」から	161
あとがき	167
	185

蔵書は動いているか、生かされているか

一か月ほど前に、ある町立図書館を訪ねた。二年ほど前から何かと評判を聞いているが、特に最近では、「地方創生」と関連つけて雑誌などでも紹介されている。二〇一二年六月に大型複合施設の中核としてオープン。床面積約一五〇〇㎡、蔵書約九万冊で、館内は美しくよく整えられ、資料の展示やPR活動、イベント活動にもずいぶん努力をしている様子がうかがわれて、好感が持てる第一印象だった。

しかし、利用者はそれほど多くない。夕方、平日としては利用が多い時間帯ではないかと思えるのだが、人の出入りはあまり見られなくて、ちょっと寂しい。利用者が少ないだけではない。時間をかけてフロアをめぐり、ときどき椅子に座って館内の様子を見てみると、何かもの足りなく思えてくる。そのもの足りなさが何か、なかなか明確には把握しにくいのだが、見ているうちに、少しずつ気がつくことがある。二〇一四年度の貸出点数は約二四万点で、施設の規模や蔵書数、それに複合施設全体の大きさを考えると、私には不思議に思えるほど少ない。何か「もったいない」という気持ちになる

フロアを見て回ると、堅苦しい本や難しい本ばかり選んでいるのではないし、蔵書のバランスにも一応の配慮がされていて、よく選ばれている印象に見えるのだが、活発に利用されているという手応えが感じられない。その理由は最終的には、棚にあった図書館建設の基本方針によるものではないかと、私には思えた。この図書館は町の大型プロジェクトの一部として建設されているのだが、その基本計画や方針を読んでみると、「資料提供」は図書館の基本方針にはなっていない。

「たくさんの情報と人に出会える場」が重視されている。農業支援や街づくりへの支援も、郷土資料の意義も謳われている。集いや交流の場としての役割は特に強調されている。しかし、貸出を重視するフロー型の図書館の時代は過ぎたとして、これからはストック型の図書館でなければならぬという考えが示されている。そのため、運営の柱をまとめた簡潔な指針にも、「資料の提供」という言葉はない。そして、あらためて棚をていねいに見て回ると、そのような図書館の基本方針は、明らかに資料の選択内容にも反映されているのである。

近年の各地の図書館づくりの計画を見ると、まずコンセプトなるものが打ち立てられ、コンセプトに合わせた方針が示される。たとえばコンセプトには、出会い、交流、まちづくりといった言葉がちりばめられ、方針には情報の発信と提供、課題解決やビジネス支援、創造と交流の場と

いった言葉が並ぶ。まず枠組みがつけられ、それに合わせて、サービス内容や資料内容も決まっ
てゆく。先に方向付けがなされている。

図書館資料をどのような目的で利用するか、そんなことは地域の人たち一人ひとりの自由であ
り、行政に決めてもらうことではない。単に本が好きで、いろいろな本を図書館で借りたいと思
う人がいたとして、それがコンセプトに合おうが合うまいがどうでもよいことである。あれこれ
学びたい知りたい人も、仕事に役立てたい人も、日常の暮らしのために本を使いたい人もいる。
楽しみや気休めで本や雑誌を読む人もいる。それぞれ自由なのだが、コンセプトの言葉はほとん
どの場合、そのうちの特定の目的を強調し、あるいは図書館以外の施設にも共通した「交流」
「集い」といった方針を目立たせている。そのために、ときにはカフェの存在が図書館施設の重
要な焦点になったりする。

その一方で、図書館のもっとも基本的な機能である「資料・情報の提供」は、主要な方針に
なっていない。資料・情報の提供は、大多数の利用者が図書館にまず第一に求める機能である。
その機能をどのような目的で生かすかは、利用者の側が自由に選び、広げてゆけばよい。図書館
サービスの基本は、異なった目的を持って資料・情報を求める一人ひとりの住民に、的確に、徹
底して、応えることである。

コンセプトの言葉は、下手をすると特定の目的の押しつけを招き、図書館の運営の方向がコン

セプトの言葉に引きずられる。目立つように設けられた〇〇支援コーナーは利用の少ない寂しい一角になり、その一方で、多くの利用者が潜在的に求めている資料でも、テーマ性がないと選択されないままとなる。期待して初めて来館した人たちは、何か充たされない気持ちのまま、図書館から離れてゆき、利用は伸びない。

私の身近にある岡山市の地区図書館では、いつも利用している幸町図書館が、蔵書一八・四万冊（うち閉架が約二万冊）、年間貸出点数が一〇七・七万点である。家族が利用している西大寺緑の図書室は蔵書八万冊、年間貸出点数六〇・三万点。資料が相当よく動き、活用されていることが分かる。もっと小規模の分館では、蔵書わずか二・六万冊で、貸出数は二六・七万点、回転率が一〇倍以上という伊島図書館もある（二〇一五年度の年報による概数）。このような図書館の状況と蔵書の回転率は、私の現役時代とそれほど変わっていないか、回転率などはむしろ以前の方が高かった。

職員だったときの立場ではいつも、限られた少ない資料費でどのように多くの人たちの要求に応えるか、どんな本を選択し、どのように的確に市民に提供してゆくか、それが毎日毎日の仕事の中核といえる部分だった。その意識で、利用者と向き合い、貸出、返却、配架される資料に手で触り、棚の本を整理し、本の動きと利用者の要求を肌で知って、新たな資料の選択に生かすの

が、司書の仕事だと考えてきた。

そのような経験をもとに各地の図書館を見学して開架資料の内容を見ると、「本が動いていない」「生かされていない」と感じるのが今まで何度もあった。必ずしも資料数の点で貧弱すぎるというのではない。それぞれの施設規模相応に、それなりの資料数が開架されているのだが、それが十分に利用されていない。冒頭で紹介した町立図書館は、岡山市の西大寺緑の図書室と比較すると、施設規模は二倍に近く、蔵書数で上回り、新規購入本が主で、町の人口も多い（三・六万人）。気持ちのよい好感の持てる施設づくりがなされ、職員の人たちの熱意も十分感じられるのに、年間貸出点数は西大寺の四〇％程度しかない。もっと多くの町民に、多くの本を提供することが可能だと思えるが、運営方針や職員の意識は資料提供に向かっていない。

この図書館の職員に、貸出を軽視する意識はおそらくないはずである。しかし、貸出をサービスの柱とし、貸出を伸ばそうという強い意識よりも、別の目的へ関心が向かっているように思える。新しい多くの資料が見た目にも美しく配架されているが、その資料がほんとうに生きて、動いて、利用されているか。利用され要求されることと、資料の奥行きや利用者層の幅を広げることとを、どのような資料選択によって両立させるのかなど、日常的に常に自問自答することから、図書館の棚は生きたり、死んだりする。小規模図書館の場合は特に、図書館の棚の本はすべて生きていてほしい。

いま貸出が多い図書館を「無料貸本屋」と呼んで、まるで時代遅れのように退ける風潮が図書館界に蔓延している。その結果、本が死んでいることにも気づかず、何年か経つと、そんな本が棚に溜まってますます棚の魅力がなくなり、最後は利用されないまま棚から除かれる。せっかくの新しい施設と新しい本が、十分活用されないのでは、発展の芽が摘み取られてしまう。ほんとうにもったいないことではないか。